

續別庶敷集
合卷完

上下



5
1798



三... 又... 集...
...
...

元禄十一年暮秋 子珊自序

續別座敷集上

埋... 別座敷... 秋風...
...
...

ら

... 雨の... 終... 子珊

... 泊... 玉... 舟

... 舟... 月... 舟

... 國... 花... 冊

... 持... 舟

... 舟... 舟

... 舟... 舟

... 舟... 舟

... 舟... 舟

... 舟... 舟

桐弓をなひの刀平 孫を

風

花をよきまゝ ^{オトナ}老 百姓

舟

まゝのまゝとこの月さる目 和を

珊

おろしうら 撰る 尺目もいふ 又の

風

大兄乃 俊直志 花の

舟

若き心 孫に 免つら 似雪

珊

杖持る子 幸の 乃 孫を

風

障る此中 沢山 た 操

舟

衣衣を 命の 利合 乃 孫を

珊

みまき 市 孫を 深る 六月

風

名

能 圃 乃 行 夫 乃 孫 乃 孫

舟

ま 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

珊

孫 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

風

孫 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

舟

孫 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

珊

孫 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

風

孫 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

舟

孫 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

珊

孫 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

風

孫 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

舟

あまを合はる蟬 ねくくの海
あはれをさる花を日をとけりて
今 牡丹を十日 一花のこけり

冊 巻 冊 舟

秋風

楚舟

子珊

各十二句

春之部

歳旦

遠東の岡を仰勢の祝のめをふ

芭蕉

新巻の巻をこけり

初解やいさあき背へみあはれ
なんとなもあはれんまをけりて
人をも河をまをりて平河を
あまをわねまのえを白のまを
まをりて起るといふやえりて
えりてあまをまをりてあはれ
は連つる鏡の中や我う擇む
えりて後人えりて大さうりり

濁子 八葉 形披 利合 山崎 子珊 秋風

は川をのりて

茶島に初日せん空をながるりま

全

志のうらと大工いらはや 松勝り 楚舟

獨居

え朝平 河心いそりの徳心く 曾良

採茶庵之若菜

まの葉はむ恒ふ心 杭や拵夢又 杉庵

前拾く自然とくさきつうね茶 夢島

川岸を急ぎ茶の層や雪の根や 貸水

いっくま小且形 庭り 齊 くれ 利合

自田から豆袋ぬいこ 茶のうら 石菊

まの葉をせこく入くる 自田に 楚舟

活心 半房をさるねるな摘 希志

ろく安をさるる二葉を摘 意程

男ホヤを茶つむ日さく 流 水

か乃間平 花のほろをみ茶 皆住

くろおきな 後入くさな茶れも 依々

鶯

いさよきささるるるれえ

心よ 閑うそささるるるる 杉風

くろおきのまの葉をみ茶れも 去來

木かたれく 雪の葉や かく 片手 猿 離

其 齋のき 居や 椽の けり 加 小 楚 舟

鶯の 心 産の けり 外の 雨 冬 後 朱 拙

雪の けり 一 起の 余所 けり 加 東 東

白の けり 雪の けり けり 憶子 加 流 水

鶺鴒の けり 雪の けり けり 大 寺 院 利 合

雪の けり けり けり けり 野 坡

梅

月 雪の けり けり けり 梅の 花 越 中 浪 化

年々 雪の けり けり 雪の 花 野 坡

梅 見の けり けり けり 林の 雪 加 意 程

折の けり けり けり 梅の 花 加 雪 芝

雪の けり けり けり 梅の 花 子 珊

山 賤の 庭 けり けり 井戸の 泉 加 舟 峰

梅の けり けり けり けり 雪の 花 加 清 風

雪の けり けり けり けり 梅の 花 大 舎 羅

雪の 梅の けり けり けり 希 志

いづれもいづれもいづれもいづれも

初梅や又書事をおひひら
紫音女

月換く露千 露のしき月夜
竹風

露のしき露千 露のしき月夜
合

梅のよ千 出く凡る様のはし
出水

柳

青柳よよく蝶乃眠り
嵐蘭

まづ物や陽乃すくうく井たの端
利合

さうつさきしき 見えよきやたさき
京 風 團

柳陰をのりし びれ蜺
雙舟

白鷺千一際ま 柳陰 加列 意程

長生を思ふ柳 柳陰 全

鶯のしき柳 柳陰 清風

八のさきしき 柳陰 小 筍

北のさきしき 柳陰 北 枝

柳陰をのりし 柳陰 一 村

朝霧をくく 柳陰 支 梁

露のしき 柳陰 席 志

ふのしき 柳陰 都 志

柳陰をのりし 柳陰 子 冊

着物とて久母識者てしし櫻	瑛	坡
供了者もてししるや初櫻	岱	水
いししし枝提ゆいしし夢	杉	風
飛好くしし流をえ切し初しし	利	合
ししきしと奴振ちししきし	子	珊
色蒲團よししちち初櫻	楚	舟
櫻ししし何しししし	勇	櫻堂
ちしし本とるれを櫻しし	北	枝
櫻ふちししし同や舟所	大	舟
子はしししししししし	遊	絲

八

折ししし櫻のさしししし月夜新	万	平
しししし細上屋もしし居ぬし	多	筆
大木もたししれぬ山乃ししし	希	志
よん水のれしし流やししし	利	合
ししししし蹴もししししし	文	鳥
ししししししししししし	里	女
ししししししししししし	和	風
櫻花ししししししししし	嵐	井
花	布	袋の
おしししししししししし	芭	蕉

吹あけりてふくまき花のよき吹うる 濁子

あせはなまあつちのよきあまのよき
あつちのよきあつちのよきあつちのよき

あつちのよきあつちのよきあつちのよき 杉風

あつちのよきあつちのよきあつちのよき 全

あつちのよきあつちのよきあつちのよき

あつちのよきあつちのよきあつちのよき 全

あつちのよきあつちのよきあつちのよき 江別 洋六

あつちのよきあつちのよきあつちのよき 野坡

あつちのよきあつちのよきあつちのよき 岱水

あつちのよきあつちのよきあつちのよき 大井

あつちのよきあつちのよきあつちのよき 風國

あつちのよきあつちのよきあつちのよき 去来

あつちのよきあつちのよきあつちのよき 曾良

あつちのよきあつちのよきあつちのよき 八桑

あつちのよきあつちのよきあつちのよき 利合

あつちのよきあつちのよきあつちのよき

あつちのよきあつちのよきあつちのよき 之の 荊口

あつちのよきあつちのよきあつちのよき 依

あつちのよきあつちのよきあつちのよき 加別 万子

あつちのよきあつちのよきあつちのよき 八子

月まはやぬまぬま 坊の草

秋之坊

花よむの見ゆふ人らちりし

流水

一月を花の陰を非書うた

昔緒

るやくとさのぬさや襟のり

翠女

寺社まららしきも花さるる

意程

るにそけし痺さるるやその表

今

うみうみあふぬらるるさの下

平成

老僧の腰押ゆふや花のり

恵松

さんさん乃経と書しきさるる

共筋

花或周回ぬらぬらや家さる

干川

十

きこもきこしきこしきこしが

文鳥

こまこまのさるるさるるさるる

智月

は里まらるるさるるさるる見え

帽底

さるるさるるさるるさるるさるる

及甫

山門や花の葉さるるさるる

朱投

川さるるの目しきりけりさるる

野江

こまこまのさるるさるるさるる

露川

山や川さるるさるるさるる

友五

林の花さるるさるるさるる

桐実

降すはとくもさるはななり 風流 石菊
 ねたふらふもさる見也 ねたふら 楚舟
 海へもさる屋の 何とさる花 石大
 花見ゆもさるの ねたふら 子珊
 神もさるもさる ねたふら 序志
 ねたふら ねたふら 希志

田家

ねたふら ねたふら 泥芥
 ねたふら ねたふら 潤志
 ねたふら ねたふら 子祐

土

花より目着下 ねたふら 楚舟

夢

ねたふら ねたふら 八子
 ねたふら ねたふら 意程
 ねたふら ねたふら 和風
 ねたふら ねたふら 杉風

病四日

ねたふら ねたふら 太夫
 ねたふら ねたふら 此筋
 ねたふら ねたふら 遊絲

雉子

看經乃半平 さいふのと雉子其声

依水

雉子の木魂や響く陸の下

意程

ふせも

山吹乃さあふふと海を渡るのさ

風園

雉子のや四方をえおつて

利合

舞 みるぬれの雉子に調子あり

野坡

雲雀

夕心もに見えさるるや塔のさ

樓堂

鶯の唇振あきさせてるる雲雀

之程

椿

探歌椿よ正月の暁

徹のつづ 餅割 ころれつと年哉

藝風

つづ 時を物乃 垣をよ 古の椿

跡坡

初花や ころれつと 切し 古の椿

之程

ふれも 椿花 今朝の角

今

度 庵より 一心ゆ 垣の 古の椿

卓袋

猫の意

高れ 敷る 申せ 祿ら ぬ

千川

ふれも 事 忘る 猫の意

楚舟

田螺

河を穿て田原の角やきくら根
子百の心はつられつらう田隠る

荆口
北枝
西騷

春雪

雪沖のぬきききききききき
新裁やの心うふりききききき

智月
流水
意程

春耕

菅代乃の春風や祖父の心は杖
骨折の初や小田の心は起し

希志
意程

七

赤いぬきぬき腰のけき田の柳
日の影はさすの心はききききき

四
子
珊

藤月

長谷乃月松すしき乃藤花

今

才魯早あはれつらう

子さきさきの心はつらう藤月

去
来

萱

新堀の心は

馬乃頬押の心はつらう
小石積地蔵乃膝の心はつらう

杉風
小
筍

焼野

名福より多に降るに焼み
嵐木

高きな焼のこころは
瓶竹

土筆 若草 美

杖の楊枝の文 若くは系
苔蘇

足虫一毒をくうは法をくし
祐甫

多まやまふく 早のさるるは
野江

従弟ふと尾花を似るつるは
檀堂

燕之塔 蕨 野老

富より色すれは計りぬる
涼葉

蕨烟や肥の柳のこころは
遊絲

五

早蕨やとくまきとくまき
貞松

ふよと人平のさるるは
四騷

木瓜

草は袋や野を鳴りし中
許六

若くは心もくははるるは木瓜の華
萩子

訪用居

木瓜小ね庵を多坂から登りて
曾良

子壘や蛙のんねる木瓜のさる
利合

藤山吹

湖院のこころは下や友のさる
丈艸

心も同くたゞられやせぬ藤のよな
 流水
 宿もあつるるや跡をきく福
 意程
 山吹や一房はく千引志すり
 野記
 山もささるるをけりく日影の心
 杉風

雜春

明日も来ぬ葉一葉乃山躰 湯
 形助
 集やあつくくくくくくくくく
 乙列
 炉もささるるの下の影の影
 意程
 遠きあけ橋をくくくくくくく
 仙枝
 陽もや向ふくくくくくくく
 梅素
 哉中

春はくくくくくくくくくくく
 嵐青
 夜の心もなきくくくくくく
 湖杏
 陽もよきぬぬぬぬぬぬぬ
 湖杏
 枕もささるるの影の影の影
 四睡
 降もささるるの影の影の影
 野坡
 暮春
 云のくくくくくくくくくくく
 利合
 わくくくくくくくくくくく
 楚舟
 花もささるるの影の影の影
 牧童
 遠もささるるの影の影の影
 杉風

ちやうく〜と見れば星の〜思
 唐のよのちや脊通りの為る思
 吾僕を和のちや〜左郷
 十間きんをより 椀を枝をさし
 降 喜方い〜と〜と〜雨
 心〜を〜を船路のゆり〜
 傾 心にち〜 流せ 須 寺
 さよ〜と〜と〜 鶴の羽 簞
 庄屋の聲を〜と〜
 神を乃各月 遠を造〜と〜

舟 冊 祐 舟 冊 祐 舟 冊 祐 舟

癸の〜と〜 勝 寺 一 河の 成 系
 心〜と〜 雉の 崎 辰 已 風
 響みの 寺を 海の 明 け 奈
 自 墮 樂 や 障を 時 外
 ちよ 婦〜と〜と〜 多 以 未 虫
 切 聲 子 花 乃 使 乃 乃 乃
 今 秋 乃 衣 乃 乃 乃 乃 八 日

秋之部

奈の〜と〜

ちよ 乃 部 乃 殊 を 下 乃 乃
 志 心 堂

初秋や榎のふも峰もあはれ	意程
さし難やこころをわづらふ身のみ	全
あはれや故庵のささるる木	藤室
はつ峰のささるる木	北枝
暑きも風もささるる木	四睡
秋の日のあはれ	流志
秋の日のあはれ	波州
秋の日のあはれ	杉風
秋の日のあはれ	曾良

七文

あはれに残りの雲はささるる	八桑
あはれに残りの雲はささるる	風國
あはれに残りの雲はささるる	猿宿
あはれに残りの雲はささるる	四睡
あはれに残りの雲はささるる	荊口
あはれに残りの雲はささるる	北
あはれに残りの雲はささるる	文鳥

七文子 痛の秘くおし我枕
父力其後家の世をさく星野
星野通後娘美人とくらす
七文の世に山と山と

伴賀

子 桐 葉
子 杉 風
望 翠

返朝

大切奈 夜をあらまらるる天の川
くぬきをわありのせうしき流河
その川にわくさくはるる夜白
ゆきさち星野にさくはるる合
七文子 矢ふも向ん後る朝

楚 舟
利 合
子 冊
太 大
意 程

二十

六乃川 雲のかさくさく
岸のさくけと星野 別を際
さくさくはるる八月の夜
返朝のついでにわくはるる夜

貞 松
荆 口
杉 風
舟 船

魂まのついでにわくはるる夜
返朝のついでにわくはるる夜

その花の後の福穂も向う水
妙なる
よのついでにわくはるる夜
こころのついでにわくはるる夜
返朝のついでにわくはるる夜

杉 風
谷 水
八 葉
利 合

踊

躍ふと馳せしむる心け馬

七六奇

魯所

あつちうと婦らあつちうと奉

希志

面白き癖を或けりて躍

うんこ

踊印

稲妻

いそぐき年癖を馬に象ふ

希志

稲妻や松子のまろき行樂

長緒

稲妻のりちうれ居る地蔵

蕉索

妹あまのちうと神のちうと

子珊

牽牛花

廿二

薔やまの月代乃新

意程

あつかも水儂の和乃極

嵐牛

あまのちうと一又とせぬ

涼美

隙あまのちうと朝のちうと

子珊

暮よあつちうとちうと

僕堂

朝顔や癖を草に

朱拙

あつかもや鹿柄

岱水

あまのちうと竹を

楚舟

暮あまのちうとあつちうと

千川

朝顔のちうと

依々

新顔平 来るまゝもねきぬが
舞や 故屋の中へ隣りあふ
あふらや ともいふのさのあま
おらふら ねのよの寝海を

女郎花簿

あま花ハ 一室もあてら
うまよ 一室もあてら
成る花 志つる花のさゆ
さもじな 山平あしな女郎花
ねうハ 仲者もあまはる

希志

杉風

全

全

全

全

意程

希志

全

秋の甘きききや 一の落の極

伴賀

土芳

中川

舟川のあまの思ゆる花
舟のあまの思ゆる花
風の流れ 跡やすきさのさくら
一畔きききききききききき

八葉

秋風

右飛

秋高

秋高のあまの思ゆる花
首のあまの思ゆる花
首のあまの思ゆる花
舟のあまの思ゆる花

意程

杉風

楓

あきふりともなれぬ秋の乱き心
心裏はやは秋のたもふり解かした
子珊

菘中類

家息よいふり心きやまらぬ
蕉索

菘初

妹若くはゆや川らん年らふ寸
平成

持後り胸もまらぬあうく
四膳

菘縄もぬるはる菘痛うぬ
波州

強あうつらふ菘もまらぬ
紫青女

あうつらふ菘もまらぬ
大草

芭

中のみまもまらぬ山流草
風國

あうつらふ菘もまらぬ
久甫

菘もまらぬあうつらふ
意程

あうつらふ菘もまらぬ
全

あうつらふ菘もまらぬ
牧童

觀世路

あうつらふ菘もまらぬ
山店

あうつらふ菘もまらぬ
史邦

野

あうつらふ菘もまらぬ
野

張声や心飛のうづらのふらふらと
流水

この月

この月や桐のしるしに在るれ
意程

ふか月や庭のま踏のそとめく
杉風

名月

女房の子織比和ふきよる月
子冊

異てよこ月は月を白帯あふ
今

隈くや徹塵のまこくく月の
檀堂

塔のたより

久月も浮世のうらな
濁子

子

久くや鹿長ふ習と味さされ
土壺桂

けろりや

明月や調のま結の癖をきき
涼葉

新聲を起はる
全

木草まも心さるるまの月
巻雁

あつた

吸とのまらるる障
嵐竹

ふか月や名月此紅の心
荊口

澄月や秋意半さるる
共筋

新法師乃年よふるれ
峯山

名月や猿意心さのさの松	文鳥
月を海や世らよはるる一人ふ	千川
行幸そ月見よ流るるさの難う幸	全
白ふりあさる白の流るる	意程
名月釣新燈や猿の口	流水
海を流るるさの流るる月の歌	八子
さしこころさしと移ら向るる	裁中 麻夕
の月や猿意心さの西さ向	加別 石鳥
新次まおささしと月見る	伴笑 車来
名月や猿意心さのさの	口少年 花幸

云

夜合さる寝ぬるさのさの	岱水
さしこころさしと移ら向るる	八桑
名月や猿意心さのさの	利合
さしこころさしと移ら向るる	支梁
鹹さしこころさしと移ら向るる	野坡
かきこころさしと移ら向るる	杉屋
さしこころさしと移ら向るる	友五
月見まはるるのさの流るる	石景
道さしこころさしと移ら向るる	太犬

述懐

一人は寝るる 月見草 泥芹
 谷一川相子よ志るるつるるる
 寝入られ月見の標を以多敷
 相原を志ぬ舟るるる月見
 一志るる物なるるる月見るる
 名月よ眠るるるるるるるる
 海女舟なるるるるるるるる
 十六夜月 如行
 心なるるるるるるるるる
 十二夜月なるるるるるるるる
 評六 脚披

娘の恋のこころ

不知何月や我身よ志るるるるるるるる 杉屋

所申月

月乃るるるるるるるるるるるるるるる 子珊

月乃るるるるるるるるるるるるるるる

月乃るるるるるるるるるるるるるるる 万子

歌くや人のこころなるるるるるるるる 全

雲頭

照降よるるるるるるるるるるるるるる 文子

掃出の影以るるるるるるるるるるるる 釣壺

木槿花野

乃中

木槿さくまゝへ出まをみ場草

楚舟

白つらや花野を初より故

楚舟

帝たししし輝をさる花世

楚舟

桐柳散

籬百包さる桐の一ふり如

涼葉

さる花を隠さる白き花の如

涼葉

さる柳さる葉の陽の出まを

涼葉

福刈

情磨地入や福刈のこまを

長崎

卯七

卯七

るに舟我意背負ふや福さる

子冊

福刈乃あいのをれやさる笑ひ

杉風

福の穂や比る志りつる花の玉

支梁

刈文乃田雨やいさる父の形

流水

畝のさる早稲さる花小な家

肥糸

嵐外

栗

いら栗を口あひし待まや

其筋

心かろりや踏まを初る家の如

伴笑

楓声

江葉

結さる葉をさる

杉風

よ尼の多さよるる

舎羅

嵩發

又日そふ切御前

桐葉

半吹そふりさ赤

風國

雜秋

氣きふく流る瀧女

冬来

病もわび苦方

山店

病何るあふ

希志

旅り

秋の月や行家根り

序志

乃

又生や瓜のちあ

意程

ゆら

流水

志堂

實の中と瀧を

万子

足跡を

我峯

刀を

苔蘚

嵐蘭

こくろ

樟堂

こくろ

之

野

紅

大瓢 鳴る 舟 事 とう 梨
えん かりし 蝦 居を けし 夜 ぎ け

楚舟 湖 招

案山子 鳴る 引板

声 漲り 鳴り 見 一 ち ち ち ち

か け

正月

お 合ふ 成人 氣の 一 一 一 一

希志

休む 百 三 痛 居 居 居 居 居 居

勇櫻堂

一 一 の 後 一 一 一 一 一 一 一 一

清 屋

と 鳴る 拾 ちて 集る 葉 一 一 一 一

杉 風

痛 急 する 聲 一 一 一 一 一 一 一 一

大 舟

汗 かく 掻 け

三

谷 越 け 鳴る 此 縄 や 意 一 一 一 一
一 一 一 一 根 強 一 一 一 一 一 一 一 一
引 板 の 意 一 一 一 一 一 一 一 一

丈 叶 氏 助

鹿

追ふ 鹿 や 角 ぬき 一 一 一 一 一 一 一 一
身 此 を 先 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
痛 め 鹿 や 角 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
た ち ち ち ち 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
い 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
掉 鹿 を 聲 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
あ 鹿 鹿 を 登 の 通 ひ 鹿 山 の 鹿

子 珊 泥 芹 昔 任 希 志 杉 風 野 長 万 平

肥後 熊 本

白菊や朝の霞を白く染めて

朝風

白菊や朝の霞を白く染めて

今

又さうぞ

白菊や又食ふに似て

今

白菊や又食ふに似て

芳良

白菊や又食ふに似て

八桑

白菊や又食ふに似て

袋山

白菊や又食ふに似て

子珊

白菊の外花の白を

利合

白菊や連折る花の香を

泥芥

白菊や極く花の香を

石桑

白菊や我は見る花の香を

者任

白菊や土の香を

楚舟

白菊や土の香を

依々

十日

白菊や朝の霞を白く染めて

利合

白菊や朝の霞を白く染めて

子珊

白菊や朝の霞を白く染めて

伴水

白菊や朝の霞を白く染めて

意程

茶畑より妻種川に流る十日也

流志

嵐き沙の朝名菊の如く

蕉索

けりよの菊の白ひや

貞松

ふりよの菊の白ひや

夢良

碓

小路より圃より

呂蚕

やふり圃の如く

杉風

十二夜

の如く似ぬらひや

流水

唐の十二夜と信

吉や先見雨見よ

杉屋

踏ぬらふ足跡

曾良

ほの月弓や

利合

ほの月弓や

休有

好陣より

泥芹

行も傘

依々

ぬきこも

石系

ふりよの菊の白ひや

左大

あめふり

潤志

暗の如く

夢舟

雨降を六月え乃をさす十二夜
ほ乃月雨を吹の

昔任
子珊

暮秋

あささるる弦撥

こももさす我を淋 去のさる
遠きぬらるる 何うつれあ 秋のさる
たつもしもた 十乃もれ 秋のさる
ふかち ぬき 輝き 秋乃れ
ぬきあ ぬ振 舞ん あささるる
居あささるる ねれ 舞のさる

芭蕉
杉花
希志
模堂
野坡
楚舟

冬瓜一門を撫さるる 島乃る
枝さるる ぬき 舞さるる

楚舟

子珊

久み 歳日 雨をさるる 風をさるる
物さるる 門をさるる 三乃れ 又 月
は舞 ぬき 舞 ぬき 舞 ぬき 舞
はさるる さるる ぬき 舞 ぬき 舞
とさるる と 陶 舞 市 中
降 つも 舞 さるる 風 舞 ぬき 舞
たさ 抽 味 吹 ぬき 舞 ぬき 舞
珠 ぬき 舞 ぬき 舞 ぬき 舞 ぬき 舞

杉花
舟
風
風
風
風
風
風

ふ	平	の	さ	め	い	ろ	り	あ	さ	川
人	顔	赤	く	虹	乃	く	川	る	る	風
雲	禪	乃	盈	ろ	く	く	ま	実	の	入
佛	寺	此	金	を	え	る	あ	の	秋	冊
月	の	以	沙	法	を	以	興	く	ま	か
あ	く	境	と	ま	ほ	乃	輪	え	つ	、
初	花	は	花	根	草	を	引	く	も	の
雨	く	ま	む	山	を	焼	あ	く	く	冊
あ	く	ま	り	去	平	ら	る	の	世	を
ま	の	家	乃	る	清	仕	う	れ	ふ	冊

涼	さ	る	川	の	流	乃	捷	の	ゆ	々
梢	の	蟬	は	耳	あ	く	く	あ	く	冊
鉾	末	残	を	分	る	村	の	ま	る	冊
い	ん	な	り	は	丁	と	五	百	里	冊
吹	く	ぬ	ほ	の	心	を	松	あ	く	冊
月	見	の	空	の	味	小	料	理	冊	
佛	檀	の	所	規	消	き	を	ま	る	冊
あ	ま	を	さ	き	は	自	家	と	ま	る
持	病	を	押	付	く	迄	年	の	ま	る
雪	を	吹	く	ま	る	後	を	く	冊	

舟を能く相〜世理を貫く

舟

〜〜〜〜〜隠居の心

風

浪久し有馬細工乃竹乃器

冊

〜〜〜〜〜も登る〜

舟

船急よ信子つら〜接よ〜

風

蓬来山崎〜葉子壺の極

冊

續別座叢集下

冬之部

時雨

電ぬき何の此雲乃り〜

子冊

深川冬月と何の〜夜〜

杉風

足袋煮〜志〜〜

合

一時〜〜〜〜

去来

小夜時〜誰と〜

山店

海〜〜〜〜

楚舟

〜〜〜〜〜の〜

利合

〜〜〜〜〜の〜

涼葉

何の〜や何の〜

世坡

神功〜〜〜〜

為

空のまはるに降るを河の清
 吹たり木にみよきる河の清
 吹たり河のまはる木はや柳
 お傘やさぬるをりしれ
 大小の清なるけり
 時鐘や風平系なる又清
 初河の火燧は愈々母なる
 醒るをくるりしれ
 橋の板をさるる
 越中
 比人
 序志
 此父追悼

一生夢酔愛没後近松一陶置

仰倫、愁の土志を
 枯葛
 鬼門の先冬もや枯つら
 枯つら根をさるる山は平
 薬弱をつあや癖の枯葛
 之れ木をさるる枯葛
 上下の枝引さるる枯葛
 此の心

冬の節 目玉のこころをいふの如く
 穴の峰 遠入のころや 冬は 冬は 冬は
 松島に 松島に 松島に 松島に
 荒縄の 荒縄の 荒縄の 荒縄の
 山を 山を 山を 山を
 冬に 冬に 冬に 冬に
 冬に 冬に 冬に 冬に

風

冬に 冬に 冬に 冬に
 冬に 冬に 冬に 冬に
 冬に 冬に 冬に 冬に
 冬に 冬に 冬に 冬に
 冬に 冬に 冬に 冬に
 冬に 冬に 冬に 冬に
 冬に 冬に 冬に 冬に
 冬に 冬に 冬に 冬に

木葉

冬に 冬に 冬に 冬に
 冬に 冬に 冬に 冬に
 冬に 冬に 冬に 冬に
 冬に 冬に 冬に 冬に
 冬に 冬に 冬に 冬に
 冬に 冬に 冬に 冬に
 冬に 冬に 冬に 冬に
 冬に 冬に 冬に 冬に

詩扣

冬に 冬に 冬に 冬に
 冬に 冬に 冬に 冬に
 冬に 冬に 冬に 冬に
 冬に 冬に 冬に 冬に
 冬に 冬に 冬に 冬に
 冬に 冬に 冬に 冬に
 冬に 冬に 冬に 冬に
 冬に 冬に 冬に 冬に

心入む粥煮了る月のさるす押加列流水

鴨子か

雄き誰干か乃ち安を加列曾良

古子哉乃か堀江乃鴨のかすあひ加列東来

行つゝあか淵のさやか名古るか磯加列好登

以軟やか定るかふ鳥か此川か利合

火燒炉

灰病を一人まかさぬからるか川か奉加列去来

小男乃か搦かんか〜か〜か〜か〜か〜加列岱氷

炉間やか書か柳か意か所か右か左か景枝加列

寒夜對客

座多さあか燈か消るか炉かの光加列荊口

雜冬

指斗か杉かのか〜か〜か〜か〜加列正秀

あか仙かはかはかのかあかやか惠か英か須か接加列風園

川か蘆か頭か乃か一か筋かきか〜か〜か〜加列子珊

こか之か寸か之か〜か〜か〜か〜加列千川

えからかをかさかふか家か情か女か房かやか大か根か引加列利合

志かもかたかるかのかあかはか枯か母か茶か檜堂

一か比かきか〜か〜か〜か〜か〜加列一西

山

水仙一あゝお日共廻り遊 うんご 野紅

居心静く草草は花の白ひは 槿堂

世を悟り紙帳あゝ衣衣 意程

戸ぬき楳のほろろは月 四臨

其秋をあゝや人の葉は 楚舟

霜

木くの根の独りろく霜色 大は 智月

何えと也花の枯り一ツ家 加 桐

子相解の烟 加 万子

初一の肩脱るふもみ 口 伴水

ふよたあゝは花を枯らす 口 意程

初花の味なきもの残る 口 四臨

花の初と花の味なきもの 口 楚舟

花の初と花の味なきもの 口 涼葉

電

降あゝ電は花を枯らす 口 野坡

電はあゝ電は花を枯らす 口 杉風

電はあゝ電は花を枯らす 口 今

小坊あゝ電は花を枯らす 口 梅山

後身より果のふりてし色
て樹の芭のさるさるの春

流水
今

雪

おのの身とてし色

万子

春の雪はてし色

浪化

暫きとてし色

八子

くすくす百津湯をさるさるの春

意程

約言や踏のさるさるの春

長緒

さるさるや堀をさるさるの春

野坡

さるの春隣あさるさるの春

合

尾列のり人

おのの春雪はてし色

新口

内より雪はてし色

女節

けしきとてし色

曾良

雪の春納言はてし色

風國

九変の雪はてし色

去来

雪はてし色

秋の坊

心師はてし色

水札

さるさるの雪はてし色

射口

さるさるの雪はてし色

十文

神をや桐の丸葉あり竹さく梨

路健

新人の鼻赤さよ雪乃くれ

四晴

申しよぬくもさく山家く形

全

け跡きまのささや夜のあえ

肥後

仕帆

病良の腕連入やぶらじ

是怪くゆりよしき見奉

秋風

初ゆき

降るゆ小家きまはありの露

全

こゝ夜

ちぬくこゝろ霞さそ月さき

全

室中

懐くもねくをきやまら入

全

氣をけし見ゆる程き小山伏

許六

物ゆる嵐よ起るまじか節

芝尺

唐うねのまじりちまよ山流

文鳥

坂あまぬまきながらひ

秋風

紋あまれ着ゆこもちちち

全

あまぬまきながらひ

子珊

こゝをけし見ゆる程き小山伏

希志

秋ゆ葉をささや夜のあえ

意程

袴と川とあつては裾乃て草

四 膝

此君庵の橋を引く

さうまけ橋とて川に流る

万 子

人毎に流るる谷んりて

流 志

雲とて中流に水掛る

平 成

主君に握り袖は流る

清 慶

山あは花や流るる

一 西

川はや唐切あつて

一 西

都とて流るる

その河の流るる

山流るる

はらり流るる

わらり流るる

水の流るる

路中に流るる

氷

いさよ流るる

月の氷つる

いさよ流るる

さよ流るる

色 蕉

子 珊

槿 堂

四 膝

春このつ三つあつぬを 神 吟
 潤 志
 順くしと振るり 水 澆る
 石 景
 いづもささるる小浅ちるえく
 岱 水
 谷もも平地も花の咲けり
 依 水
 け日の水さみり 一 倍
 右 丈

静ぬゆきなうく 雲くおき鏡 一 されとね梅二本信ふ
 二ねの 梅貫氷霜の形をうらう 梅花の新聞る
 雖温陽氣流梅の事速あるは梅志の冊に作られてるの
 志の冊と丈ちるの梅の事梅の同く又なる梅の事梅の事

日中溜ちるさうの梅よ亡作のさ紫の末を漢さほ雅を
 慕ひい孔のえ子由有若と色ひ今く長く同門を
 何な情あえく梅さう文れよけ雁あさきまの梅
 何増梅さうりれいすの梅さうりよき梅さうり

元禄十二年初冬 梅 風

續別座敷集追加

疎形乃梅根結さうりさうり梅さうり 利合
 さうり梅さうり五月さうり乃 曇り 雪月良
 啼かせぬ夏の蛙乃きさうり梅さうり 心 水

素名

同好よなるを出船り部々

楚舟

牡丹

花有様をば先へ此舟

杉屋

室は子女と歌を擧

と華しく白粉さしほきく奉

合

賑り牡丹乃花の文アこる

利合

杜若

杜若さあるもりき降き華し

松屋

菊はさるくちよ同中ふきく

希志

四十九

氣はあまのこをば花のさし

楚舟

五月雨

ささ地をばあまのこをば花のさし

松屋

五月あやちのこをば花のさし

合

持病心

死にけしあまのこをば花のさし

合

あまのこをば花のさし

楚舟

ささあまのこをば花のさし

千川

和川やぬきぬき得る鼻月あ

太夫

味のぬきぬき七月あや花のさし

依

幸崎や ねま 地中 是又 月向

楚 舟

堀 牛

さう 病る 命 捨ひ やう 一 あり

利 合

折 只 何 を つ じ じ 一 力 ぬ け あり

岱 水

志 直 なる 才 なる あり け 一 堀 牛

石 棠

こ ころ 一 一 母 一 け 一 堀 牛

杉 屋

帯 張 け

あ なる や 帯 一 け 一 け 一 け 一 け

四 膝

挑 灯 を け 消 一 一 見 る 帯 一 け 一 け

洞 志

葛 蒲 原 川

早

く ぬ け や を け 帯 一 原 一 小 家 一 け

杉 屋

福 身 一 け 一 長 一 け 一 け 一 け 一 け 一 け

楚 舟

雑 夏 熱 海 の 磯 一 け 一 け

夏 草 一 集 一 け 一 け 一 け 一 け 一 け

嵐 牛

そ ー あ ー け 一 け 一 け 一 け 一 け

け なる 合 の 小 家 一 け 一 け 一 け 一 け 一 け

跡 披

川 け け け け け け け け け け け

牧 産

點 川 の 新 一 け 一 け 一 け 一 け 一 け

跡 紅

次 の け け け け け け け け け け け

此 助

蜀 竹 一 け 一 け 一 け 一 け 一 け 一 け

小 蜀

涼 小田の 水 千川

涼 小田の 水 千川

涼 小田の 水 千川

涼 小田の 水 千川

涼 小田の 水 千川

涼 小田の 水 千川

涼 小田の 水 千川

涼 小田の 水 千川

涼 小田の 水 千川

慈姑乃哉 小田の 水 千川

白雨

慈姑乃哉 小田の 水 千川

慈姑乃哉 小田の 水 千川

慈姑乃哉 小田の 水 千川

白雨

慈姑乃哉 小田の 水 千川

慈姑乃哉 小田の 水 千川

慈姑乃哉 小田の 水 千川

涼

家門へ来り解の如きこゝみ奉

楚舟

涼き抱え見せぬわら

蕉帯

こゝろんと月夜をたれとさしめり

杉風

月影や浅き涼きふかき

利合

雨のなみいりちりり

野坡

子

元禄十三年辰仲夏

三十八 三ツ友トカ



